

## 植村正久の生い立ちをめぐる —評伝叙述の充実のために— (2)

中島 一仁

〈会報No.66から続く、前号の内容は次の通り〉

はじめに

先行研究の問題点

生まれから修学期まで

(1) 父

※引用文献の一覧は前号をご参照ください

-----

(2) 母

既にみた植村正久の父についての事実から、母ていを「(殿様の) 奥方」といったように言うことの誤りも自明であろう。『寛政重修諸家譜』5によると、植村家代々の当主の妻は旗本か小大名の娘であり、厄介の身であった禱十郎は正式な婚姻をすることも許されなかったはずである。

正久が母の実家について直接語ったものは見いだせないが、「上総国武謝田村の医を業とせる中村家であつた」[青芳1935:7]という。「成東駅(略)を出で南下、自動車にて十分ばかりで(略)上武射田と呼ばれる地点に出るが、此所は植村正久の母の実家である漢方医中村氏の住居のありし所」[佐波1937:669]ともされる。

「旧高旧領取調帳」を見ると、上総国山辺郡に上武射田村はあり、与力給知と代官支配所から成っていた。よって、先行研究には、上武射田村が植村家の所領であつたとするものがあるが([佐波1937:665]、[雨宮2007:51]など)、誤りである。

ここで植村家の領地(知行所)を明確にしておきたい。「旧高旧領取調帳」などによると次の通りである。①上野・山田郡石原村(約276石)、②同・邑楽郡古氷村(約302石)、③武蔵・足立郡上尾下村(約217石)、④上総・武射郡本柏村(約96石)、⑤同・同郡下野村(約207石)、⑥美濃・方県郡則松村(約421石)。

4カ国の6カ村で合計約1519石。上総における領地は武射郡の本柏と下野の両村である。武射田村を植村家の所領とする誤りは、武射郡との混同

から起こったものであろう。

武射郡本柏村と下野村は、現在の千葉県山武市松尾町本柏と松尾町下野である。一方、山辺郡上武射田村は、現在の千葉県東金市上武射田である。直線距離で6~7キロほどである。

武射田村の中村家については確たる史料は得られなかった。母ていの実家の可能性があるものとして、東金周辺の中村姓の医師を挙げておきたい。

・山辺郡 田間 (内科) 中村松敬

・同 真亀 (本科) 中村庸斎

(以上、文政8年「房総医家人名録 全」、『茂原の古文書史料集』17:51)

・山辺郡 東金 中村養貞

・同 小沼田 中村玄俊

・武射郡 成東 中村了達

(以上、明治9年「医術営業仮鑑札交付人名表」、『千葉県の歴史 史料編』近現代7:877-878)

九十九里浜に近い上総国東部の医師の娘が江戸の旗本屋敷で当主一家の「厄介」の子を生んだというのはどういう事情なのであろうか。禱十郎とていの個別の事情を知ることはできないが、一般論として想像できるのは、ていが奥女中奉公に上がっていたのではないかということだ。再び三嶋家の例をみると、本邸内には9人の奥女中がおり、当主付、当主の娘付、養母付、茶の間付など主人・場所別に分かれていた[三嶋・西脇1987:392]。

このような武家屋敷に奉公する女中の供給源は、既に奉公したことのある女性が血縁を伝手に紹介する場合、同様の女性が地縁を伝手に紹介する場合、当該大名家の支配地域から探し出す場合があった。そして奉公に出る目的は、裕福な商家や農家の娘が屋敷で「高等教育」を受け、良縁を得る機会を狙ったものであった[畑2009:289]。江戸の武家屋敷に上がる女性奉公人の出身地としては、武蔵国多摩地域がよく知られており、同国生麦村の例も研究されている[増田1990;大口1995]。

実は上総地域は足軽・中間などの男性武家奉公人の重要な供給地であった。これらの者たちは、下総・上総・信濃・越後など関東やその周辺の農

村地域に住む抱元や抱宿といわれる周旋業者が、現地で集め江戸に送った者たちであった。上総の抱元としては武射郡本柏村の弾次や鳥喰村の六右衛門などといった者たちが史料上に現れている〔千葉県の歴史 通史編近世2：540〕。

これらのことを総合すれば、正久の母ていの実家は、読み書きなどの基本的な教養は地元で身に付けさせ、さらなる教育を授けるべく、嫁入り修業などを目的に江戸の武家屋敷での奥女中奉公を願ったのであろう。奉公をするうち、厄介であった禱十郎の妻になったのであろうか。

### (3) 養豚

江戸幕府倒壊後、禱十郎一家がどこに住んだのかについては、『植村全集』8収載の「余が基督教に入りし顛末を述べて日本国第一の新教教会の創立に及ぶ」で正久自身が次のように語っている。

江戸の住居も快らず辺土に空しく日を経過するも計を知らざるに似たりとて親等が僅かの資金を携へて横浜に至り怪しげなる九尺間口の家を借り給ひしは明治元年の夏過ぎて未だ程を経ぬ頃にてありき。

禱十郎一家は明治維新で江戸を離れることになり、上総の旧領地に帰農し、豚飼いなどをした〔青芳1935：16〕、上総の東金に近い旧所領で帰農した〔佐波1937：665〕などとされる。

植村自身は江戸から横浜に移ったように語っているが、あるいは上総に一時逃れ、そこから横浜に移ったのかもしれない。上述のように1500石旗本としての植村家は徳川宗家とともに静岡に移住したのであり、禱十郎一家が上総へ移り住んだのだとすれば、それは植村家から随従を許されずに取り残された揚げ句の選択であったのであろう。

大身旗本家の生まれである一家が維新で零落し、「豚飼い」をしたとする叙述は非常に印象深いところである。しかし、植村自身が書いた自伝に「豚飼い」に当たる箇所は見当たらない。根拠となる記述を探すと、富士見教会の会員であったGalen M. Fisherという人物が植村から聞いた話を書き残した手記の中に出てくる〔佐波1937：673〕。そこでは豚を飼ったのは上総でのこととはされていないのである。その部分は次の通りである。

In 1878 I entered an English college opened by Dr. S. R. Brown. The tuition was ten yen a month, equivalent to fifty yen now. I did all sorts of work to earn expenses. … (略) …I also raised pigs —then considered

rather disgraceful. ……

1878年という記述は誤りではなかろうか。1873（明治6）年だとすれば、横浜でブラウン塾に入った事実と符合する。授業料を捻出するために「豚を飼った」とフィッシャーに語ったことになる。

横浜における養豚の歴史は慶応年間に始まる。英国人が飼育場を設けたほか、外来種を導入した日本人も交配・飼育していた。明治2（1869）年には旧幕臣の角田米三郎が協救社を設立、太田養豚所を作って種豚を飼育した。同4年には神奈川県に牧畜掛が置かれ、民部省から米国産種豚を借りて、太田養豚場を継承したとみられる太田種畜場を設けたが、翌5年には廃止した〔斎藤1990〕。

1873（明治6）年、養豚場の汚水などをめぐる問題から市街地での飼育が禁止された。以後、当時はまだ人家の少なかった中村、南太田、西戸部などの谷あいには養豚場が移っていった〔中島1986：25-26〕。

一方、植村が住んでいた場所はというと、南太田であったとされる〔青芳1935：17〕。この南太田は、現在の横浜市南区南太田のことであろう。

横浜での養豚業の進展と植村の居住地を合わせ考えると、植村が「豚を飼った」としているのは、住居のあった南太田近辺で営まれていた養豚場で、いわばアルバイトをしたというようなことを指しているのではないだろうか。

### まとめ

京極純一は、植村が旗本の子息であったということから彼を「幕府時代の大きな憧憬者」と位置づけ、維新政権と距離を置いたとしている。大内三郎も植村の立場を「野党的反明治政府」としている。

だが、見方を変えると植村にとって明治維新は「厄介の庶子」という立場から自己を解き放ってくれた契機でもあったと言えるのではないだろうか。だとするなら、植村にとって明治維新は両義的な意味を持っていたのではないかと思う。

また、植村の母が植村に対して武士としての誇りを捨てずに、植村の家名の再興を果たすよう説いたとされるが、その家名再興というのは、よそから植村家に入り、家を奪った者たちから家名を取り戻すという意味を持っていたのだらうと思う。植村のもとに伝わった系図に、父を10代目、自身を11代目と記していたことはそれを裏付けるものではないだろうか。（完）

【追記】研究会での発表後、植村の父が1500石

の旗本であったとされたのは、キリスト教界の指導者になった植村の経歴を周囲が飾り立てたからではないかとの意見を頂いた。佐波が植村家を朝臣になったとしたのも、故意かどうかは分からぬが、天皇制との関係をよく見せるためであったのかもしれないと思った。

※2019年6月15日例会発表

## 横浜指路教会第二代仮牧師

ジョージ・W・ノックス

中島 耕二

### 1. 誕生から来日まで

ジョージ・W・ノックス (Rev. George William Knox, 1853-1912)は、1853年8月11日にニューヨーク州 Rome で、父 William Eaton Knox (1821-1883)、母 Alice Woodward Jenckes Knox (1821-1900) の4男1女の三男(4番目)として生まれた。父は長老教会の牧師、母は長老教会の婦人活動家として知られた。ノックス・ファミリーからは大実業家、政治家および教職者が多数輩出している。ノックスは Rome Academy、ハミルトン・カレッジを経て、オーバン神学校に入学、1877年春に卒業と同時に長老教会海外伝道局から日本派遣の宣教師に選ばれた。5月11日にオーバン出身のミス・ホルムス (Anna Caroline Holmes, Sep. 25, 1851~ Mar. 11, 1942) と結婚式を挙げ、9月にカリフォルニア州 San Jose に移動し、日本行きの準備を整え、同月29日にオクシデンタル&オリエンタル(O&O)汽船 Oceanic 号に乗ってサンフランシスコ港を後にした。

### 2. 横浜時代

アメリカ長老教会在日ミッションは、1876年5月以降、同じ長老主義のアメリカ・オランダ改革教会及びスコットランド一致長老教会と、合同の協議を進めていた。それまでは日本において一教派として拡張を目指し、1873年の暮れに日本長老公会(長老会=中会)を立ち上げていた。その間、海外伝道局では長老教会の伝統を身に付けた E.R. ミラー、O.M. グリーンそして W. インブリーの精鋭を連続して派遣した。ところが、上述のように他教派との合同を進めることに方針を変えたため、1877年急遽教会政治上寛容な新派(New School)系のオーバン神学校卒業生であるノックスおよびニューヨーク市のユニオン神学校卒業生の T.T. アレキサンダーと T.C. ウィンの三人を日

本に派遣した。

ノックス夫妻は1877(明治10)年11月2日に横浜に到着し、居留地39番の宣教師館(旧ヘボン邸)に旅装を解いた。同館では前年の春からヘボン夫妻に代わって、J.C. バラ夫妻がバラ学校と呼ばれる17歳から19歳の30名ほどの男子校を開いていた。ノックスは早速、ウィンと共に英語の授業を受け持った。また H. ルーミスが、前年に病によりアメリカに帰国したため、無牧であった住吉町教会(旧横浜第一長老公会、現横浜指路教会)の第二代仮牧師を引き受けた。当時、長老教会在日ミッションは、同年9月17日に先の二つの教会と合同し日本基督一致教会を成立させていた。そして、この教会を担う日本人教職者養成のため、10月7日、築地居留地6番の小会堂に東京一致神学校を開校した。

そこで長老教会在日ミッションは、バラ学校を東京一致神学校への神学生供給校とすることを決め、横浜から築地に移転し東京一致神学校と連携を強めることとした。1880(明治13)年4月26日、バラ学校は築地居留地7番に校舎を新築し、校名を築地大学校と命名して開校した。ノックスは住吉町教会の牧会があるためしばらく横浜に残り、翌1881(明治14)年の夏に39番の土地と建物を売却し、築地居留地27番に新築した宣教師館に移った。

### 3. 築地大学校・東京一致神学校教授

築地に転居したノックスは築地大学校の教授として2年間務め、1883年に東京一致神学校の教授に転じ弁証論、教義問答及び説教を担当した。ノックスは当初オーバン神学校の超教派主義の伝統に反し、ジョナサン・エドワーズの保守的なカルヴァン主義を信奉していたが、来日後時間の経過とともにリッチェル等の自由主義神学に傾いていった。

ノックスは1882年9月に朝鮮修信使の非公式随員として来日した李樹廷を指導し、1883年4月9日に李が芝露月町教会で安川亨牧師から受洗する際に立ち会った。これを契機に朝鮮伝道にも思いを寄せ、1883年7月にアメリカ長老教会宣教師では初めて現地視察を行った。

### 4. 高知伝道

1884年、日本基督一致教会は同教会牧師安川亨の人脈で、板垣退助、植木枝盛、片岡健吉等の立志社及び自由党の幹部との関係が生まれたことから、高知伝道を開始しノックス、タムソン、フルベッキ、ミラー等を高知に派遣した。同年11月にノックスはミラー夫妻と高知に入り、12月末まで滞在

し各地で説教会を開いた。ノックスはローマ書講解に基づき教義を判りやすく説明し、また聴衆の質問に明快な答弁を行い、キリスト教に触れたことのない人々に、福音の喜びを印象付けた。ノックスはミラーと共に板垣退助、片岡健吉と親しく日本の内外について語り合った。特に片岡健吉は1871年に十三大藩欧米視察団に参加し、視察団の通訳兼案内人のタムソンと一年にわたって接触の経験を持っていた。翌1885年5月15日に彼らの努力が稔り遂に高知の地に一つの教会が誕生した。この日、ノックスは高知を再訪し片岡健吉以下に授洗したが、片岡の信仰に一抹の不安を抱いた。しかし、片岡ほどの人物を教会が受け入れないことは、伝道面でマイナスと考え、片岡に丁寧な教理の説明を行い、片岡の理解を確認した上で洗礼を受けた。片岡に続いて、坂本直寛、原保太郎、西森拙三等合計13名がこの日ノックスから受洗した。

#### 5. 一時帰国、明治学院神学部教授

ノックスは1886年9月から12月まで東京大学で、フェノロサの後任として哲学及び審美学の講義を行い、キリスト教夏季学校で講演し、『福音新報』紙への協力等、多忙な日々が続いた。

1887年、ノックスは来日10年目を迎え賜暇(furlough)を得て、一時帰国をすることになった。ノックス夫妻は在日中に5人の子を得たが、最初の子は夭折し青山墓地に埋葬された。4人の子は長女Maryal (1879-1955)、二女Caroline Tuck (1883-1970)、三女Dorothea (1884-1975) および長男Jay (1888-1976、長老教会牧師となった)であったが、この時長男のJayはまだ生まれていなかったもので、総勢5人での一時帰国であった。一家は一年半を本国で過ごし、その間に長男のJayが生まれた。一家6人は1888年9月18日に横浜に戻った。帰国中、ノックスは日本での活躍に対し、プリンストン大学から名誉神学博士号の学位を贈られた。

日本に戻ると留守中に明治学院が創立し、東京一致神学校は明治学院神学部となっていたが、白金に新校舎が出来るまでしばらく築地で授業が続けられた。ノックスは築地居留地27番の自宅から、毎日向かいの17番の旧東京一致神学校に足を運び、やがて1890年9月に神学部校舎が完成し学生も白金に移ると、ノックスは築地居留地から白金まで通う生活になった。

#### 6. 宣教師辞任と帰国

明治10年代は新政府による文明開化政策及び条

約改正運動の一環として欧化政策が採られ、プロテスタント・キリスト教は時代の寵児として急速に信者を増やした。しかし、井上外相による鹿鳴館政策が行き詰まりを見せると、ナショナリズムが台頭し、キリスト教は俄然彼等の攻撃目標に変わっていった。1891(明治24)年の内村鑑三の不敬事件や前年の「インブリー事件」もこうした社会の風潮を反映して起きた出来事であった。こうしたナショナリズムは日本人教職者にも伝染し、外国人の宣教師に対する彼等の態度も変化を見るようになっていった。こうした状況に、東京一致神学校設立以来の有力教師であったアメルマンが、1892年2月夫人の病気を理由に日本を離れて行った。ノックスはアメルマンの担当課目である、旧約聖書注解その他を受け持つこととなり、忙しさが倍増した。それでもノックスは慶応義塾から招かれると、1991年から一年間心理学の講義に出講し、その学問的興味は益々旺盛であった。ところが、同僚宣教師の中で最も信頼関係にあったインブリーが1993年4月に、二人の息子の教育問題を理由に宣教師を辞して、アメリカに帰国することになった。明治学院神学部は東京一致神学校以来、先のアメルマン、インブリーそしてノックスの3人の主力神学教授に支えられ、アメリカ本国の有力神学校と全く遜色のない学問水準を確保して来た。その一角ならず、二つがここに日本を去ることになり、ノックスは本国にいる母親の病気も視野に入って、大きな心の動揺を覚えた。

インブリーが日本を去って二ヶ月後、ノックスは遂に帰国を決意した。1893年6月19日、ノックス一家は15年余りの日本での奉仕を終えて横浜の港を後にした。

#### 7. アメリカでの活躍

ノックスは本国に戻り、1894年12月1日からニューヨーク州RayにあるThe Rye Presbyterian Churchで奉仕を始めた。同教会はニューヨーク市の北郊外に位置し、多くの中産階級が住み、教会員もほとんどがUpper Middle層の人々であった。ノックスの都会的な感覚、明晰な説教と弁舌が教会員の賛同と信頼を得、翌年12月4日に正牧師に推薦された。ノックスは5年間その職にあったが、この教会の長い歴史の中で、その後の50年も加えて、最も平穏で満足された期間となった。ノックスの評価は歴代牧師の中でかつてないほど高いものとなり、1897年の4月から10月まで、Westchester Presbytery(中会)の議長(Moderator)に推薦され、地区の教勢発展のために貢献した。

同年、ニューヨーク市のユニオン神学校 (Union Theological Seminary) の弁証論の講師に招かれた。やがて教授として招聘され、1899年2月1日にユニオン神学校の教授に就任し、哲学、宗教史および海外伝道の講義を受け持った。また神学書の執筆にも励み、多くの著書を刊行した。こうした研究実績は各地の大学において高い評価を得て、1904年にHobart Collegeから文学博士(LL.D.)、1910年にWesleyan Universityから神学博士(D.D.)そして1911年にYale Universityから神学博士(D.D.)の学位を受領した。また1903年にはYale Universityで講師を務めた。ユニオン神学校では1906-1907年と1908年に学部長および校長代理も務め学校経営の責任を負った。

1904年に時の明治学院総理の井深梶之助が来米し、インブリーも交え三人はノックスの自宅に集まって、明治学院の将来について語り合った。また、この時、日本は日露戦争の最中にあり、ノックスは地元の有力紙に日本弁護の論説を何度となく発表し、親日の情を示した。戦後、日本政府はノックスに勲四等旭日小綬章(the Fourth Class of the Imperial Order of the Rising Sun)を贈って感謝の意を示した。

## 8. 京城での客死

1911年にユニオン神学校は“Christianity in the Far East”のプログラムを組んで、ノックスをインド、中国、朝鮮そして日本に派遣した。日本では同神学校の学長ホール博士(Rev. Thomas Hall)と合流する計画であった。ノックス夫妻は6月にニューヨーク港を出航し、欧州を回ってインド、中国、満州を經由し、翌1912年4月18日に平壤から京城に着いた。その後の計画では、朝鮮から神戸に入って、高知、伊勢そして5月下旬に東京に到着の予定であった。ノックスは京城に着いた時、風邪の自覚症状があった。20日には秘園の見学を予定していたが、夫人のみ出掛け本人はホテルで休んだ。ところがその晩40度の高熱を發した。その後、小康を得たが、医師の判断にもミスが続き、同地の長老教会セベレンス病院に入院中に肺炎を起こし、4月25日の午後5時30分に客死した。日本政府(朝鮮総督府)は、ノックス夫人に遺体を軍艦で本国に届ける申出を行ったが、夫人は周囲の迷惑を考えて5月1日京城で葬儀を行った。そして同じ日の午前11時に、ニューヨークのユニオン神学校の礼拝堂でも追悼集會が開かれた。夫人は遺骨を携えて来日し、5月4日に東京に着き、同月10日に井深梶之助、植村正久ほか

在京の関係者20人ほどで、内輪の追悼会を高輪二本榎西町のミス・ウエスト(Annabel Blythe West, 長老教会女性宣教師)の自宅で行った。夫人は5月11日に満州号で横浜を發った。日本政府はノックスの重態を知って、勲三等瑞宝章を贈った。

彼の遺骨は6月3日、ニューヨーク州Knoxboroの墓地に埋葬された。同年10月22日にユニオン神学校で厳かにそして盛大に、ノックス追悼記念集會が催された。※2020年2月15日例会発表



## 岡見京と縁の人びと：ツルー夫人

堀田 国元

### 1. はじめに

筆者は、2016年4月に「ディスカバー岡見京(私家版)」を刊行したところ、その年の12月の横プロ例会で、「留学クリスチャン第一号女医岡見京の一生」と題したお話をする機会をいただいた。その後、新たな情報が得られ、また誤りの指摘などを受けたので、それらを取り込んで「増補版 ディスカバー岡見京」を上梓する予定であったが、実現しないまま時が流れてしまった。そうした中、昨年(2019年)10月の例会で、「岡見京と縁の人びと-ツルー夫人を中心に-」という題で岡見京の人生に最大の影響を与えたツルー夫人についてお話する機会をいただいた。以下はその概要である。

### 2. 岡見京とツルー夫人の関係

岡見京(1859年生れ;旧姓西田けい)は、横浜共立女学校で学び(73~78年)、在学中に横浜海岸教会で受洗した。卒業すると、東京女学校(最初の官立女学校)で学んだ後、桜井女学校(桜井ちかが76年に創立)に英語教師として奉職した(81~84年)。この間、横浜共立女学校と桜井女学校でツルー夫人に教えを受け、貧民伝道に傾倒していった。80年代の日本では、西洋式の女子教育がもてはやされ、米国やカナダの各教派ミッションが相次いで女子校を設立した。そして、活動経験により自信をもった米国の各派婦人伝道局が婦人宣教医の派遣など医療伝道に意欲を見せ始めていた。当時、宣教師の家族、特に女性が病床に就いたとき最も困ったことは看護の心得のある日本人女性がいなかったことであった。そうした中、84年に結婚した京は、夫の岡見千吉郎が米国留学(ミシガン農科大学)に出発した後を追うように、フィラデルフィアのペンシルバニア女子医科大学に留

学（85～89年）し、日本人女性として初めて医学博士の学位を取得した。米国滞在中、フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の会長であったモリス夫人の全面的な支援を受けて過ごした。帰国（89年）後、東京慈恵医院で婦人科主任医師として3年ほど奉職した。退職後、自宅でしばし開業していたが、女子学院においてツルー夫人が起案・設立した衛生園と看護学校の運営に協力するため93年に家族とともに衛生園に移住し、翌年から診療を開始した。その翌年、ツルー夫人は体調を崩して（胃潰瘍）衛生園で療養することになり、京は医師として懸命の看護をしたものの、その甲斐もなくツルー夫人は96年4月に逝去した。ツルー夫人55歳、京37歳であった。葬儀は数百名の知友の涙の中に執り行われた。柩は夫人に教育された数百名の淑女によって角筈村から青山の墓地に送られ、涙ながらに葬られた。現在、ツルー夫人のお墓（青山墓地）は女子学院の厚意によって手厚く管理されている。

ツルー夫人の遺志を継いだ岡見京は認可を得るために奔走し、ツルー夫人の親友であったアンナ・ホイットニーの息子でW.ホイットニー赤坂病院院長の協力により同病院の分院として認可を得ることができた（97年11月）。以後、フィラデルフィア婦人伝道局の支援が途絶える06年まで、夫の千吉郎と力を合わせて衛生園を運営した。

子供の頃に母を失くしていた京にとって、横浜共立女学校に入学した15歳の頃から導きを受けたツルー夫人は京にとって人生の師であり母親のような掛替えのない存在であった。

### 3. ツルー夫人の行跡・足跡

1873年ツルー夫人は、アメリカ婦人一致外国伝道協会の一員として中国（清）に赴任し、翌74年に長老派の宣教師として来日し、横浜共立女学校で教えた。76年、原女学校（東京）へ移り、フィラデルフィア婦人伝道局へ移籍した。78年、原女学校の生徒らとともに新栄女学校（74年にB六番女学校として開校）へ異動。79年、帰国するアンナ・ホイットニーの交替要員として金沢の啓明学校へ英語教育と伝道のため1年間赴任。80年、長老派教会員の桜井ちかによって設立（76年）され、日本人女性が運営する日本のキリスト学校のモデルであった桜井女学校では、経営者の桜井夫妻が伝道活動のため札幌へ移住することになり、ツルー夫人は後事を託された。同校は、学生42名（主に公務員子女、22名が寄宿生）、附属幼稚園12名、貧学校30名を擁していた。ツルー夫人は、翌81年

から実質的経営者となり、矢嶋楯子を桜井ちかの後任とし、日本人が責任をもって計画・尽力できるようになることを指導方針とし、女子教育、看護婦養成所開設などに取り組んだ。因みにこの年、岡見京が英語教師として同校に奉職した。

先ず、女子教育に関するツルー夫人の言動について。「善良なる模範の価値」と題した桜井女学校の講演では、「……私の愛する姉妹方よ、格別に諸君に申すが、“精神を能く磨き、真に高尚なる志をお立てなさい。”……能き模範を置きて我儘の心を棄てて日々之を為し行ふはなかなか六ヶ敷ことであります。」と述べている。困難なことに遭遇しても、その考え方を変えることなく対処することがそれまでの人生でツルー夫人自身が体得したことであった。そして、「己の務めを怠り己の為さざる可らる事をなさずして送るは尤も大なる苦痛」というメレー・ライオン（Mary Lyon）の生き方を示して講演を締めくくった。因みにメレー・ライオンは、女子高等教育が限極されていた19世紀前半の米国で、男子校に負けない、質の高い教育の機会を女子に提供することを目指し、あらゆる困難を跳ねのけながら邁進して1838年にマサチューセッツ州にマウント・ホリヨーク女子神学校を開設した女性である。ツルー夫人は、崇高な信仰と信念に基づいてミッション（ニューヨーク伝道局、フィラデルフィア婦人伝道局）に働きかけ、深い愛情と行動をもって日本女性の自立を促し、教育（叱咤激励）したことを以って極東のメレー・ライオンと呼ばれるようになった。

90年に桜井女学校と新栄女学校が合併して誕生した女子学院のホームページには、「高尚なる志を活かす真の力を養成しなさい。自分の務めを怠ったり、力があるのに他人を助けなかったときに苦痛を感じるような女性になりなさい。一人ひとり、活かされる道や与えられた器は違うが、他人や社会のために働くようにしなさい」と生徒に説いたツルー夫人のことが掲載されている。

そして、田中弘志女子学院院长は、キリスト教学校教育2004年6月号において以下のように述べている。“「東洋のメレー・ライオン」と呼ばれたツルーは桜井女学校内に日本で初めての幼稚保育科や看護婦養成所を設置したほか、学外ではあるが女性のための療養施設として衛生園を創設するなど、文字通り日本の女性たちの生活改善と教育のために生涯を捧げた祈りと実行の人であった。自律の精神で自己を高め、自己犠牲と奉仕の精神

で愛をもって他者に仕える、そのような婦人宣教師たちの生き方は、明治期の日本の女性たち、特にミッションスクールで学ぶ若い女性たちに多大な影響力を持ったが、その精神は今日のキリスト教学校の女子教育に間違いなく引き継がれているし、現代のコンテクストの中で改めてその意義を確認し、問い直す必要がある”と。

次に、看護婦養成所・衛生園の開設について。83年10月、ツルー夫人は、休暇を取って帰国した。その少し先に帰国していたバラ夫妻は、妻のリディアが日本で肺炎に罹ったときに劣悪な看護を経験したことを基に、フィラデルフィア婦人伝道局で、日本に看護学校を設置することの必要性を説いた。リディアの主張は受け入れられたが、彼女が急死してしまったため、その遺志をツルー夫人が継ぐことになった。日本に戻ったツルー夫人は、桜井女学校内に86年に看護婦養成所を設置し、87年1月スタートした。ツルー夫人は、米国から看護教師を招聘するかホイットニー医師の協力を得て小規模で基礎的な看護教育を行うコースを考えていた。

一方、横浜や東京に居留する宣教師と家族、中でも女性が病床についたときの深刻な問題は、看護の心得のある日本人女性がないことであった。状況を改善することを使命と感じたツルー夫人は女性の病前病後の休養のためのサンタリウム(療養所)の建設を決意し、角筈に衛生園をつくり、岡見京に運営の協力を依頼した。

岡見千吉郎が田村直臣と協力して発行した「ツルー夫人之傳」には、“熱心にして忠実なる献身的伝道者、慈母の愛を以て学生を教育したる教育者・感化者、能く計画し能く実行し、能く始ありよく終あらしめたる成功ある事業家なりき”とのツルー夫人評がある。

#### 4. ツルー夫人の人となり

以下にいろいろな人によるツルー夫人評を紹介して終わりとす。

親友であったアンナ・ホイットニーは臨終のとき、娘のクララに「神様は私を愛してくださった。おまえも愛してください。ただ神を愛し、信頼し、いつも皆離れずに暮らさなさい。きっとツルーさんはいつも親切にしてくださいますよ」と言い残した。クララはツルー夫人のことを「強い、頼りになる、誰でも本能的に寄りかかりたくなるような人」と評している。

また、ルーミスは、「バラ夫人(リディア)とツルー夫人ほどすべての人から尊敬され、思慮分

別があり、クリスチャンとして情熱に満ち、伝道の仕事に相応しい人は日本に他にいない」と述べている。

最後に、岡見千吉郎が田村直臣宣教師と協力して99年に発行した「ツルー夫人之傳」に岡見京が寄せたツルー夫人の哀悼文を以下に抜粋して紹介する。

「ミセスツルー師は堅信上帝に奉事し、使徒をもって私淑す。嘗て福音伝播の爲め清国にあり。日本に來朝して小妹と相識れるは、師が共立女学校に教師となり、小妹が後進として教訓を受けしを初とす。爾來20有餘年、小妹の師に於ける生母も敵わざりき。殊に師が永眠前の2、3年間は小妹幸いに師と寝食を共にし、師が忠実と博愛とに感化薰陶せられて感激せしこと其幾回なるを知らざりき。

…師の懇篤なる熱心なる輔導誘掖に感奮して起ち、生命の水に浴せしもの多かりき。今其一例を挙げんに、嘗て師が近郊を散歩する途上、會々乞丐児に逢ひしことあり。師、惻隱の心勃々として亦之を棄て去るに忍びず、携へ歸りて衣食を給し、且つ資金を與えて自營の道を得せしめたり。斯くの如きもの十を以て数へつべし。

…人の一たび師の温容に接するや一言一句博愛の肺腑に出づるものあるに感激し、一言の賜能く終身の護心符たるもの多し。…師に怨言を述べんとするものあるも一たび師の慰藉と辨明とを聞くに及びては悦服せざるなかりしは小妹等の常に見聞せし所なりき。

…然るに、幸乎不幸乎將た上帝の神慮乎、師偶々病を角筈なる衛生園中に得、荏苒終に起たず。その病苦中に尚且つ斯道の爲めに企圖計畫して毫も倦怠の色あることなく、やがて其病の革まるや主治医來たつて師に皮下注射を施さんとしける時、看護者誤りて其薬品を覆へし。亦、一滴を止めざりければ主治医怒つてこれを詰責せしを師は微笑して徐に宥めていふ。何事も神の摂理にこそあれ、この薬の翻るゝもの焉ぞ我が爲に幸いならざるを知らんやと毫も苦痛の色を現さざりし。其容貌や宛として未だ小妹等の眼底にあれどもツルー師今也亡し哀しいかな。」

#### 主な参考資料

ツルー夫人之傳(田村直臣;1899)、女たちの約束(亀山美知子;1990)、アメリカ婦人宣教師(小檜山ルイ;1992)、女子学院の歴史(1992)、ツルー書簡集(女子学院;2010)、ディスカバー岡見京(堀田国元;2016) ※2019年10月19日例会発表

## エッセイ

### コロナの時代にあって

岡部 一興

去る6月末のニュースでは、世界で新型コロナウイルスに感染した人が1千万人に達し、死者は50万人に迫っているという報道があった。しかし、人類は繰り返し様々な災難に遭遇してきた。歴史は繰り返す、天災は忘れた頃にやってくるという言葉される。ペスト、赤痢、スペイン風邪、最近ではサーズに代表されるように、さまざまな伝染病、感染症に人類が苦しんできた。今回のウイルス禍もあつという間に世界に広まった。当たり前のように暮らしてきた日常が奪われて行った。これは根本的に私たちの生活を変えてしまった。今まで当たり前のようにして、教会に通い、図書館に行ったり横浜プロテスタント史研究会の例会を行ない、またあちこち出かけていたことができなくなり、社会生活がストップしてしまい、家に留まる生活をしている今日この頃である。何と恵まれた生活をしていたかを実感している。この時期、家に閉じこもる中で今まで専門外の書はなかなか読めなかったが、ここに来て、今まで読めなかった書を色々読むことができたのは幸いなことであつた。

昨年10月末、「長谷川誠三」の伝記を教文館から出版した。筆者は小さな歩みであるが、キリスト教史の研究をしてきた。日本のプロテスタント・キリスト教は、開港都市に始まり大都市に続いて地方都市に浸透し、最後に農村地域に行き渡った。この書はキリスト教が農村に布教される過程において、いかにキリスト教が受容されたかの一形態を長谷川誠三という人物の事績を通して考察した。日本のプロテスタント・キリスト教史において、草創期のキリスト教ほどユニークな進展を示したものはなかった。明治10年代のキリスト教は、都市に農村に新しい地盤を求めて躍進し生き生きとした展開が見られた。ところが、明治20年代に入り天皇制を頂点とする国家主義的社会構造が確立されると、内村鑑三不敬事件に見られるように、キリスト教は相容れないものとして圧迫されるようになった。これ以後、曲折はあつたにせよ、戦後に至るまで厳しい社会的条件と対決しながら教会形成を余儀なくされた。とりわけ、地縁血縁関係が強い農村ではキリスト教の土着は難しく、地主が教会を支える形で教会が運営された。長谷川誠三が属した藤崎教会はまさにその典型であつた。

長谷川誠三が所属した教会は、藤崎美以教会とあってメソジストの教会であつた。1899（明治32）年に盲人牧師藤田匡が着任している。この年に赤痢が蔓延し、青森県では2790人が死亡する騒ぎとなった。藤田を中心として、一刻も早くこの悪疫が収まるよう祈った。同年9月、藤崎教会では「沈静するまで公会、日曜学校を休み、有志の祈祷礼拝を為すこととせり」という決定をし、日曜学校を休校とし、有志者が礼拝を守る形でのいでいた。このとき、長谷川誠三も赤痢に罹り、何とか健康を回復させたという記録が残っている。

ところで、なぜ長谷川誠三なのか。それには、筆者のキリスト教への関心を述べなければならない。日本のキリスト教人口は、1%にも満たない存在であるが、なぜ多くの人々がキリスト教に導かれたのか、イエス・キリストの父なる神が導いた不思議な力はどこから出てきたのか、そのルーツを客観的に探究したいということからキリスト教史に関心を持った。

それでは、教会史はどう捉えるべきか。教会は十字架と復活を信じる群れである。教会は罪人の集まりであり、罪許された群れでもある。教会史はキリストを信じる群れが主から託された宣教のわざをどのように行なってきたかを辿ると同時に、将来どのような教会を目指すかを指し示すものといえる。教会史は神の民の歴史を叙述するもので、救済史を指し示すものでなければならないと考える。

#### 【編集後記】

会報68号をお届けします。今年の2月15日の中島耕二さんの発表を最後にコロナ禍のために、横プロ研が休会になっています。この状態が当分続くようですが、どのようにしたら研究会が再開できるか模索しています。会計を担当していた遠藤香さんが、一時退会することになりました。今までのご奉仕に感謝します。去る5月1日のお知らせで伝えましたように、今後のことを考えて、研究会のスタッフを強化するために、以前の役員が7名でしたので、2名増やし若返りの意味で辻直人と熊田凡子の両氏に役員になって頂くことになりました。

役員：熊田凡子、園木幸夫、辻直人、中島耕二、中村早苗（会計）、花島光男、岡部一興（代表）どうぞよろしくお願い致します。（K.O.）